Vanishing Point

バニシングポイント

佐藤正午

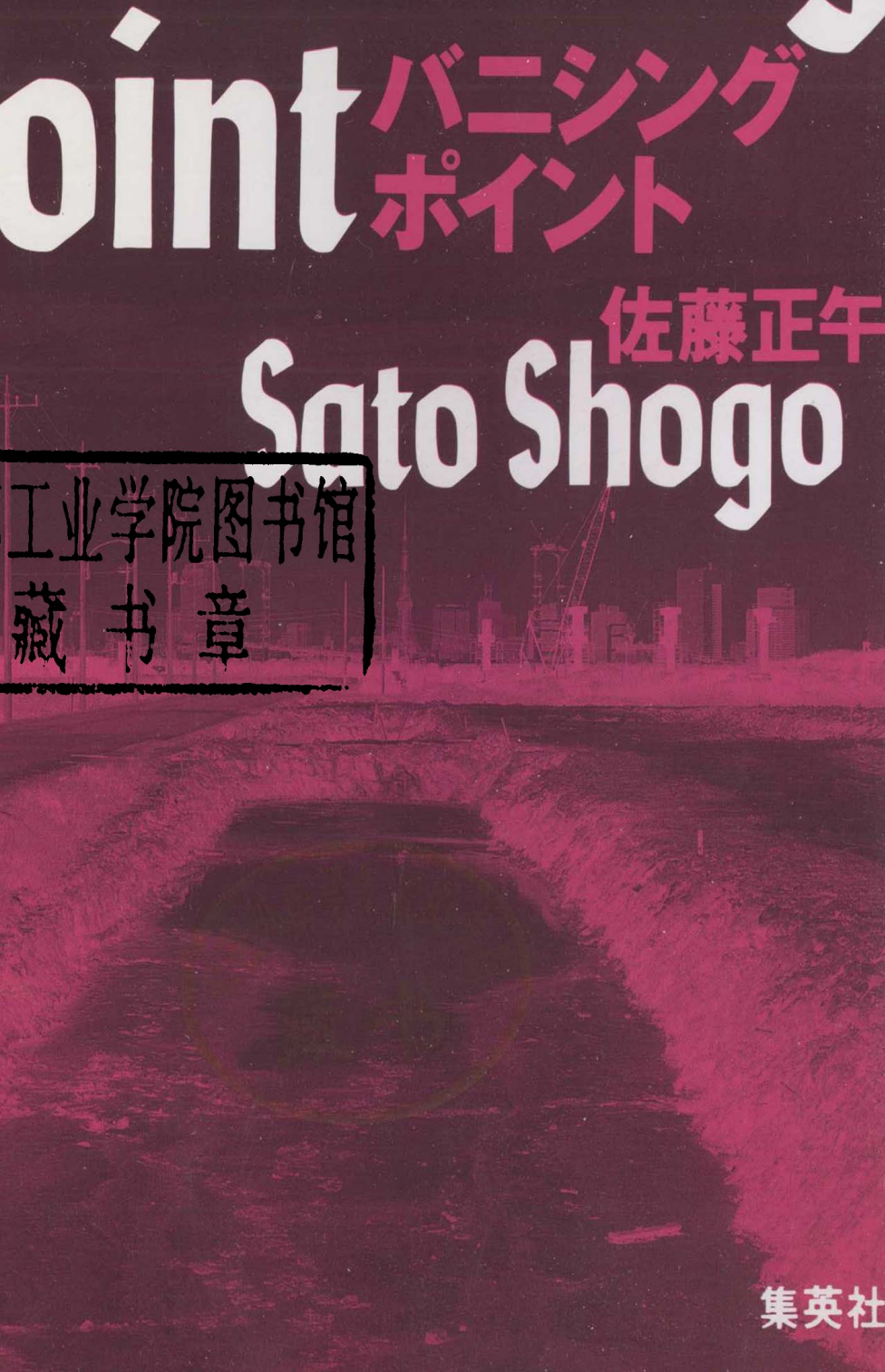
Sato Shogo

oint バニシングポイント

佐藤正午

Sato Shogo

工业学院图书馆
藏书章



集英社

Vanishing Point

バニシングポイント

著者　佐藤正午（さとうしようご）

1997年3月20日　第1刷発行

発行者　小島民雄
発行所　株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10　〒101-50
電話（編集部）03-3230-6100（販売部）3230-6393（制作部）3230-6080
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　文勇堂製本工業株式会社

¥1,650-

著者との諒解により検印は廃止いたします。
定価は帯およびカバーに表示してあります。

©1997 Shōgo Satō, Printed in Japan
ISBN4-08-774256-3 C0093

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

目次

運転手　4

恋　34

伝言　66

姉　98

拳銃　132

カード　164

少年　200

装丁　太田和彦

写真　北島敬三

「ヴァニシングポイント」（一九九二年）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

バニシングポイント

1

今年四十歳になるタクシーの運転手、武上英夫（たけがみひでお）は秘密を三つ持っている。

少なくとも本人はそう思い込んでいるのだが、そのうち一つは、言ってしまえば妻への他愛ない隠し事にすぎなかった。二つめは、秘密というよりもむしろ彼自身の独特な傾向とでも呼ぶべきもの。そして三つめは、数年前の冬の夜に起こった放火事件にまつわる秘密だった。

だがその話の前に。

彼には口数の多い妻と子供が二人いる。

武上英夫がその口数の多い妻と――つまり後に彼の口数の多い妻となるべき年上の女と――出会ったのは十五年前、二十五歳のときである。当時、彼はコカコーラを小売店へ配達してまわるトラックの運転手だった。一つ年上の女のほうは、桟橋のカー・フェリーの切符売場で働いてい

た。

二人の仲を取り持ったのは彼の職場の女事務員だった。

「高校の同級生にいい子がいるんだけど、会ってみない？」

と軽い感じで誘われて、最初はドライブにつきあわされたのだ。

その事務員のボーイフレンドを入れて四人で、一時間ほど走って遊園地へ向かう間、後部座席にすわったふたりはほとんど口をきかなかった。隣の女は彼の顔すらろくすっぽ見ようとはしなかった。彼は二三の質問をして短い返事をもらったあげくに、途中でそれ以上の質問をするために知恵をしぼることを放棄した。もともと話し好きなほうではなかったし、相手が年上だということもあって、どんな言葉づかいで喋っていいのかもよく分からなかった。

あとは運転席の事務員と助手席のボーイフレンドが気を遣って喋り続けた。まだ若かった武上英夫は適当に相槌を打ちながら何べんも隣の女を盗み見た。太っているというのではないが全体にふっくらした身体つきの小柄な女で、横から見ると薄手のセーターを突き上げる乳房の形が刺激的だった。こんな女を抱けたらいい、一晩じゅう好きにできたら幸せだと、車中の彼はそのことばかり考えていた。

遊園地に着いて二手に分かれ、彼は初対面の小柄な女と半日を過ごした。その半日が、彼の二十五歳以降の人生を決定づけた。女はジェットコースターに乗っても、ツインドラゴンという名の激しく揺れる方舟に乗っても、控え目に声をあげるだけでそれほどはしゃがなかった。おとなしい、無口な女だ、と彼は思ったけれど、その点が気に入らぬわけではなかった。乗物にも飽き

て、ふたりでベンチにすわってソフトクリームを嘗めているとき、
「本当はね、あなたの顔、ずっとまえから知ってたの」
と年上の女が打ち明けた。心持ち紅潮した顔で、視線を、正面の三色すみれの花壇に据えたまま、
「このことは、あなたには絶対に黙っててって、秀美には頼んでたんだけど、きっと後で面白がって喋るに決まってる」
そう言いながら、右手の人差指に垂れたソフトクリームをあわてて嘗めてみせた。要約するとこういうことだ。桟橋の売店にコカコーラを配達に来る彼の顔を、切符売場で働く女は以前から注目して見守っていたのだった。
「へえ……」
と驚きを抑えて、彼は曖昧に口ごもった。でも、どうして俺はこの女の顔をいままで知らずに過ごしたのだろう。そう思いながらまじまじと横顔を見つめて初めて、彼女の鼻の低さに気づいた。改めて見れば見るほど地味な顔立ちなのだった。だが当時はそんなことは何でもなかった。横から見るとめだつ鼻の低さなど、横から見るとめだつ乳房の大きさに比べればどうでもよかった。武上英夫は咄嗟に知恵をしぼって、以後の人生を左右するこんな言葉を口にした。
「あしたから必ず、配達のときは切符売場に寄ってコカコーラを差し入れするよ」
そして彼はその約束を忠実に守った。
ふたりが結婚するまでに、女は日に一本ずつ、合計一五二本のコカコーラの差し入れを受け取

ることになった。初めて遊園地にドライブした日付と、彼が配達の仕事をやめた日付の両方を彼女は後々まで記憶していたので、その数字に間違いはなかった。

2

結婚した時期をいえば、彼の職場の女事務員とそのボーイフレンドのほうが半年ほど早かった。

結婚と同時に女事務員は彼の職場を去った。それから後は、お互いの結婚披露宴のとき以外に顔を合せる機会はなかった。口数の多い妻から彼らの噂を聞かされることは何度かあっても、武上英夫じしんが彼らに会う機会は二度と訪れなかった。あの遊園地へのドライブから十年が過ぎた頃、彼らの離婚騒動の話をどこからか妻が仕入れてきた。その噂話をはんぶんいい加減に聞き流しながら、武上英夫はもう二人のどちらの顔もぼんやりとしか思い出せなかった。

秀美がね、と口数の多い妻はいつのまにか付き合いの途絶えたかつての同級生の名前を、そして彼にとっては懐かしい職場のうろ覚えの女事務員の名前を、そう呼ぶのだった。

「秀美がね、とうとう子供を連れて実家に戻ったらしいの、遅かれ早かれってみんな思ってたけど、やっぱりね、働きに出たのが間違いよね、子供を二人とも家に置きっぱなしで、そりゃ外に働きに出れば気は晴れるでしょうけど、彼女、若返ったっていっとき評判だったの、でもそれで

旦那さんの酒癖がなおるわけじゃないでしょう、よっぽどひどくなったみたいなのよ、もう手のつけようがないんだって、酔っててもさすがに子供には暴力はふるわないらしいけど、家の中はめちゃくちゃでね、ドアは壊すし、襖は穴だらけにするし、テレビのブラウン管だって蹴飛ばして割った揚げ句に足を何針も縫ったり。

ねえ、哀れよね、昔はあんなに陽気な男の人だったのに、あのころから酒が入るとちょっと変なところがあったけど、酒さえ飲まなきゃ立派な板前だって、前の店の社長さんも保証してくれてたっていうのに、もうこの辺じゃどこも雇ってくれる店はないのよ、自業自得といえばそれまでだけど、仕事したくて頼み込んでも相手にしてもらえない、お金が足りないからって面当てみたいに秀美は働きに出る、それで余計につらくなって酒を飲んだんじゃないの、子供はもう怖がって寄りつかないどころか、お父さんとも呼ばなかったんだって、可哀想に、見たいテレビも我慢してね、テレビくらい新しいのに買い替えてやればいいのに、秀美がみせしめのために壊れたのをそのまま置いてたんだと思う、彼女の性格ならやりそうだもの、実家に連れていったら二人ともご飯も食べずにテレビの前から動かないんだって。

秀美はかえってさばさばしてるんじゃない？　もう旦那さんの顔を見るのもいやだし一緒にいるだけでも鳥肌が立つって言ってたくらいだから、秀美のお母さんは娘がそんなに言うのならって前々から同情的だったんだけど、秀美のお父さんの方が、自分も酒飲みだからやっぱり少し点が甘いらしくて、とにかくもういっぺん話し合ってみろ、何といっても好き合って結婚した仲なんだからとか、どんな夫婦にも照る日があれば曇る日もあるとか、そんな感じで説教するだけ、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

いままでは真剣に取り合ってくれなかったのが、さすがにこんどのことでもう呆れ返っちゃって、自分の方から秀美に、早く離婚の手続きをしろって催促してるらしいの。

あのね、本当のところは、秀美はずっと前から別れる腹づもりで、こんど旦那さんがテレビを壊すような何か事件を起こしたら、それを理由に実家に戻るつもりでいたとあたしは思う、そこへ灯油なんか撒いちゃったでしょ？　いっぺんでおしまいよね、秀美が夜仕事から帰ってみたら玄関に灯油が撒いてあったんだって、そいで旦那さんは上がり口のところに酔っ払って寝てたんだって、マッチの箱を握りしめて、前々から、家に火をつけて一家心中してやるって酔っ払ったときの口癖だったのね、子供たちは部屋の奥でおびえて泣いてるし、秀美はもうたまらない、と思ってその晩から子供を連れて実家に戻ったの。

翌朝、秀美のお父さんが様子を見に行ったら、本人は酔いが醒めてしょんぼりしてたそうだけど、家の中はそこらじゅう灯油の匂いがぷんぷんしててね、それで娘の言ってたことは大げさじゃなくて、本当にこの男はおかしくなってるって見切りをつけたのよ、一歩間違えば、本気でこの男は火をつけかねないって、もう秀美のお父さんは頭に血がのぼっちゃって、娘と別れろ離婚届に判を押せってその場で迫ったらしい、でも旦那さんのほうはめそめそ泣くだけで話にも何にもならないの、それで、とにかく秀美は子供を連れて実家に戻ったんだけど、ただこのまますんなり離婚ってわけにはいかないだろうってみんな言ってる、きっともう一悶着あるわよ、だって秀美の旦那さんは朝起きたときはおとなしくてめそめそしてるかもしれないけど、いったんお酒を飲むと人が変ったみたいに狂暴でしょう、でもって毎日毎日酒を飲んで酔っ払って、誰もそれ

を止められないんだから、弁護士が間に立ったって何したって離婚話がまるくおさまるはずないじゃない、そう思わない？　それにね……ねえ、先にお風呂に入ってよ、その間にシチューを温めるから、ほら憲和、恵子姉ちゃんにお風呂早く上がんなさいって、お父さんが待ってるからって。

それにね、今日聞いてあたし驚いたんだけど、実は秀美にはもう別に男がいるんだって、勤め先のね、白楽天ってお店、そこのコックやってる三つも年下の男、和食から中華に乗り換えたってみんな噂してる、秀美も若返るわけよ、でもそのことが旦那さんにばれたら大変よ、ただでさえ狂暴なのに秀美が浮気してるって知ったらどうなることか、秀美のお父さんだってまだその男のことは知らないはずだし、だから先が思いやられるっていうわけ、離婚するとか再婚するとか秀美は口では簡単に言ってるらしいけど、子供のこともあるしね、まだまだ問題は山積みなのよ、どうなるか分かんないわよ、憲和、恵子姉ちゃんにお風呂早くしなさいって言ってきた？　ちゃんと言ったの？　ほんとにもう、小学生のくせに一時間も二時間もお風呂でどこを洗ってるのかしら、あの子は」

3

秘密の話だ。

武上英夫の秘密の一つは、言ってしまえば本当に他愛ない隠し事にすぎないのだが、妻には内緒の銀行口座を持っていることである。しかもその口座に、武上英夫はギャンブルで貯めた金を少しずつ預金している。

コカコーラの配達の仕事からタクシーの運転手に転職するまで、彼はまったくギャンブルには縁のない青年だった。それから半年ほどして結婚したときにも、仲人をつとめたタクシー会社の社長が披露宴のスピーチで、武上君は若い運転手の中ではいちばん堅実で仕事一筋だと社内の評判だが、息抜きにせめてパチンコなりと覚えたらどうか、新婦の和恵（かずえ）さんもそれだけは認めてやってほしい、うちの系列にはパーラー何々というパチンコ屋もあることだし、と言って出席者の笑いを誘ったくらいである。新婚当時に一度だけ、その系列のパチンコ屋にはふたりで遊びに行ったことがあった。ほんの一時間足らずで一万円も負けてしまい、帰り道で妻は何度も、何十ぺんも、もったいない、もったいないと同じ言葉を繰り返した。少々くどいな、と武上英夫は思いながらも、もったいないという点についてはやはり同感だった。

だから結婚後も、しばらくの間は、運転手仲間が夜食をとりに集まる屋台でたとえば競輪の話に花が咲くことがあっても、彼は隅の椅子で黙ってラーメンをすすっていたのだ。だがものには限度ということがあるし、おなじシフトで働く仲間には仲間同士のつきあいということもある。小遣いのうちからたった千円でも賭けてみないかと誘われれば、それももったいないと意地を張れるほど武上英夫は変り者でもない。そして競輪にしろ競馬にしろギャンブルにはビギナーズ・ラックという言葉がつきものなのだった。ある日彼が初めて買った三通りの車券のうち一枚が当

たって、信じられぬほどの払戻しになった。

彼はその十万近い払戻し金を会社のロッカーの中にしまい込んだ。ちょうど妻の誕生日が近かったので、何か高価なプレゼントでもと考えないでもなかった。でもこんなに高い物を、と妻は目をまるくして驚くかもしれない。これを買うお金はどうしたの、としまり屋の妻に聞かれたらどう答えればいいのか。迷っているうちに次のレースの開催日がやって来て、彼は同僚たちの話に耳を傾けたうえで儲かったうちから一万円だけつぎ込むことにした。今度は本命だったので5倍程度の払戻しだった。それでも差し引き四万円の得である。「武上、そのうち蔵が建つぞ」と同僚の一人にからかわれたが、悪い気はしなかった。

翌週、彼は誰のアドバイスも受けずに一人でスポーツ新聞を読んで、メインレースに一万円ずつの三点買いを試みた。それがまたしても大当たりで持金の合計が三〇万を越えたとき、この金のことはもう妻には言うまいと彼は決心をつけた。仕事の途中に前売りで買った車券だったので、日を置いて市役所内にある銀行へ出向いて払戻しを受け、その場で口座を開いた。ギャンブルで儲けた金を銀行に預金したと知れたら笑われそうなので同僚たちにも内緒だった。

預金通帳と印鑑はいまも会社の個人用のロッカーの奥に隠してある。あれから十何年かの月日が流れて、運転手仲間の顔触れはかなり入れ替った。四十歳になった武上英夫はいまでもラーメン屋の屋台の隅の椅子を指定席にしているし、夜食をとりに集まった同僚たちのギャンブルの話に積極的に加わろうとはしない。事実、彼はこの十何年かの間、格別ギャンブルに熱心だったわけではないので、仕事で車を流している途中に、気が向けばほんの小遣い程度の金で前売りを買

うという姿勢をずっと守っていた。そしてそれが当たれば払戻し金を例の口座に入金するということを繰り返してきた。

その長年の繰り返しの成果はいま通帳に刻まれた金額に現れている。あるいは武上英夫はギャンブルに関して独特の強運を、ないしは独特の自制心を持ち合せているのかもしれない。ギャンブルでこつこつ金を貯めるという、世間の常識では考えられぬ荒業をやり遂げる才能が彼には備わっていて、それこそが、実は武上英夫の本当の秘密なのかもしれない。

だが本人はそんなふうにはただの一度も考えたことがない。

夜勤明けの人気の絶えた更衣室で、彼はロッカーの奥に隠した通帳をときおり取り出して眺めることがある。使うあてもない金だが、着実に金額が増えていくのは悪い気がしない。ただし同時に、妻に対する秘密が時を経て大きくなりすぎたとも彼は感じている。いまさらこの金のことを妻に打ち明けるわけにはいかない。おそらくこの先も隠し通すしかないだろう。十数年の間に、武上英夫の秘密の口座には四〇〇万以上の金が貯まってしまったのだ。正確には総額（利息を含めて）４２２７３２１という数字が通帳には打ち込まれている。

武上英夫の二つめの秘密は、やはり彼の性格の独特な一面、自制心に関わっている。

要するに武上英夫はギャンブルだけではなく生活全般においても行き過ぎを好まないたちなのだ。一言で言えばその秘密は、どこまで自分の欲望を抑え切ることができるか、そんなゲームに似ている。だから何も取らない者が勝ちというルールになるのだが、何も取らないで我慢するこ

との中に自然と密かな楽しみも含まれている。

それは昼夜の区別なく勤務中に来る。たとえば信号待ちで車を止めて、何げなくルームミラーに目をやる。するとそこに（当然だが）後ろにつけた車のドライバーの顔が映っている。若い女の顔が。もっとも武上英夫が自分よりも若いと見当をつけただけで、実際には三十代の後半くらいなのかもしれない。むこうはタクシーのルームミラーに映った武上英夫の目を見ている。武上英夫はそのルームミラーに映った女の目を見返す。

信号が青に変るまでの短い間にふたりは何度も目を合せる。つまり、その間相手はこちらを見つめ続けているらしいので、武上英夫のほうで（不意に息苦しくなって）目をそらしても、またルームミラーを見上げるとそこで目が合ってしまう。しかもそれは後ろにつけた車の場合だけではない。信号待ちで真横に停車した車のドライバーとも同様のことが生じる。その場合は、相手の女と武上英夫は車の窓越しに何度も目を見合せることになる。右側に停車してこちらに近い側にハンドルのある車のときには、ふたりの間の距離はいくらもない。先に窓を開ければ呼応するようにむこうの窓も開いて、それでいっぺんに話が通じてしまいそうなのだが、当然ながらそんなことはしない。

信号が変ると武上英夫はもう一度息苦しさを味わいながら車を走らせる。次の角で左へ曲り、後方からさきほどの女の運転する車がついてくるのを確認する。おれはあの女と寝るだろう、と武上英夫は思う。このまま人気のない場所までタクシーを走らせて止める。後ろの車はどこまでもついてくるだろう。おれは人気のない場所でタクシーを降りて、そばに止った女の車まで歩

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c